介護老人保健施設しおん

症　例　概　要　ご利用者　：90代女性

利用期間　：R6年12月～現在

既往：仙骨骨折,胸腰椎圧迫骨折,骨粗鬆症,白内障、認知症

経過　：ご自宅で長男夫婦と同居。腰の痛みが強くH30年2月に歩行困難となり病院受診。腰椎圧迫骨折と診断を受け入院となる。退院後は運動特化型デイを利用開始,介助増加の為長男夫婦の介護疲れ、ご本人の長男嫁に対しての遠慮があり施設入所申込みに至る。

内　　容

入所時はADLは高く、生活動作に関しても杖歩行だったが自立で施設生活を送っていた。居室内で趣味のクロスワードを行って過ごしていた。フロアで過ごすことは食事のみで他利用者さん、職員とは挨拶程度だった。もともとご本人はまわりの人に気を遣い、人に迷惑をかけたくない方だった。入所から7ヵ月経った辺りから認知症状が見られるようになり、特に排泄に関して執着が強く夜間、日中問わず1日に何十回も行くようになり不眠が続いた。生活リズムも崩れはじめ、食事量、水分量も減り活気が無くなった。マイナスな発言が多くなり「早く死にたい。どうしたらいい?」と不穏状態が続いた。その後居室内で転倒があり、痛みから寝たきりになりさらに認知症状が進行しBPSDが出るようになる。ご家族も、食事も摂れない状態のご本人を見て受け入れられなかった。食事が摂取できるようにご家族にあんこや海苔巻き、本や書く事が好きでしたと細かなことも教えてもらい、本来のご本人らしく生活が送られるよう他職種でカンファレンスをこまめに開催し食事、痛みの緩和、筋力向上、精神的不安軽減などまずは「自力で行える事を増やす」を目標にケアを実施した。食事に関しても誤嚥リスクもあるがご本人の好きな海苔巻きが食べれるよう少しずつ嚥下訓練をし形態を上げて、海苔巻きが食べられるようになった。筋力低下も進んでいた為、痛みを見ながらどこまでが出来るか?残存能力を使いADLも上がってきた。精神面で不安や焦燥感が強く、ケアをする際はご本人の感情や気持ちに寄り添い安心感を与えるような声掛けや対応を行い「良かった。ありがとう、安心」と笑顔やご本人らしさが出て来るようになってきた。体調も落ち着き食事量、体重も増え夜間帯も休めるようになり生活リズムが整い、ご本人から「どこか行きたいね」と話があり、入所から初めて他利用者さんと外出企画が実施出来た。ご家族から「外出なんて出来ると思わなった、お寿司まで食べれるようになってありがとう」と感謝の言葉を頂いた。現在は車椅子での生活だがご自分で操作し入浴以外は自立で行えるようになった。以前と違うのはご本人から「これだけ手伝って、〇〇したいから手を貸して」と職員へ信頼してもらえるようになった。職員もその人らし

さ、尊厳を大切に出来た事でご本人が笑顔で生活が送れるようになった事で、今回の症例をキラキラ介護賞としました。

各部署の役割

ケア：傾聴、入眠出来やすい環境作り

リハビリ：残存機能の把握、筋力アップ

栄養科・ST：食事摂取へのアプローチ、嚥下訓練

NS：痛みの緩和、服薬調整